

# 李殷相「詩人李貞璵論（詩人ホイットマン論）」の比較文学的考察

金<sup>キム</sup>

暁<sup>ヒョ</sup>

美<sup>ミ</sup>

はじめに

韓国で一九世紀アメリカの詩人、Walt Whitman（一八一九～一八九二）が紹介されたのは、日本の植民地下に置かれていた一九二〇年五月、朴憲永が雑誌『文友』に「Youth, Day, Old Age, and Night」（青年は昼、老年は夜）を翻訳、発表したのにはじまる。以後、呉天錫、金炯元、李光洙、朱耀翰、鄭芝溶などによりホイットマン詩が翻訳、紹介されることになった。

その中で、韓国の時調詩人として広く知られる李殷相（一九二五年に発表された「詩人李貞璵論（詩人ホイットマン論）」（『朝鮮文壇』一九二五年五月号）は、従来の研究者等により、「韓国最初のホイットマン紹介論文」（鄭獻<sup>2</sup>）、「詩人論としてしっかり様式を備えた優れた例」（金容稷）といったように、外国文学が韓国に輸入され始めた際の手堅い

「詩人論」の稀な例として、韓国国内で高い評価を受けている。

しかし、このような評価にも拘らず、この論文に関する具体的な検証はほとんどされていないというのが実状である。唯一、鄭獻の研究が詳しく、二〇〇六年四月には「詩人ホイットマン論」を主題にした単独の論文も発表された。

鄭獻はこの論文で、李殷相を「ホイットマンを偉大な思想家、世界的作家と確信し、その哲学と作品を体系的に紹介した最初の韓国知識人」と位置づけている。鄭は李の論文について、当時の韓国の状況を十分に考慮した上で、ホイットマンの原詩と照らし合わせながら、詳細に検討している。

しかし、鄭の論文には大きな限界がある。「詩人ホイットマン論」には李のホイットマン観と日本におけるホイットマン受容との関連を窺わせる、いくつかの言及がある。そのため、「詩人ホイットマン論」を理解するにあたっては、日本

におけるホイットマン受容との比較文学的視座からの接近が不可欠である。しかし、その必須の手続きがなされていないため、李殷相の論文についての分析が、多くの場合「推測」の域を出ていないのである。

このような問題点を踏まえて、本稿では、韓国初の本格的なホイットマン紹介論文である李殷相の「詩人ホイットマン論」を、近代日本におけるホイットマン受容、特に有島武郎の「ホイットマンに就いて」と比較することを通じて、その性格を明らかにすることを試みる。

「詩人ホイットマン論」は、時間軸に沿ったホイットマンの伝記的な事実説明に加えて、ホイットマンの詩や思想に関する李殷相なりの解釈が強く打ち出された論文である。李論文の構成及び内容を簡略に紹介すると、まず、「一、緒言」と題された序論のなかで、李はホイットマンの家系に関して簡略な説明をした上で、続く「二、ユの生涯（彼の生涯）」で、ホイットマンの伝記的事実を述べている。次の「三、ユの詩と思想（彼の詩と思想）」の中では、ホイットマンの詩を具体的に例に挙げながら、詩の特徴や思想を述べており、最後の「四、結論」では、ホイットマンの詩「Gods」全文を引用して結論の代わりとしている。

序論にあたる「一、緒言」、並びに本論の「三、彼の詩と

思想」において、李が「日本の「ホイットマン研究者」有島武郎」の名前を幾度か言及していることから、有島武郎と李のホイットマン観に何らかの関連があることがわかる。そして、筆者の調査の結果、李殷相の論文は、その内容のほとんどが有島のホイットマン論である「ホイットマンに就いて」から抽出され、翻訳されたものであることが明らかになった。このことは李のホイットマン論の性格を決める重要な要素となっている。

有島武郎の「ホイットマンに就いて」は、大正一〇年（一九二一年）三月一五日発行の新人会第二回講演集『新社会への諸思想』（聚英閣刊）に収録され、さらに有島の歿後『ホイットマンに就いて』（大正一三年六月二三日、聚英閣刊）という表題で単行本として刊行された講演筆記で、有島武郎のホイットマン論のもっとも充実したものとして評価されるものである。

論文の構成は、まず前半部で「ホイットマンの生涯」について語り、後半でホイットマンの詩の特徴を具体的な例と共に説明する、というものである。

この論文の特徴として挙げられることは、有島が「詩人の生涯」を語る前置きとして、有島独自のホイットマン観とされる「ローファー」についてかなり詳しく説明し、強調している、ということである。ローファーに関する内容を少し紹

介すると、有島はまず「人間には先天的といつてもいい位に二つのタイプがある」ようだといひ、一つ目のタイプは主義とか主張とかを持った人で、理想家という型に属し、もう一つのタイプはローファー (Loafer) の種類で、理想家のように外面的にはつきりした輪郭を持たず、「謂わばうつろいで歩いている人」であり、それが「善く行けばホイットマンのやうな人になる」と説明する。「詰りそこら中を歩きまはつて、偶然ぶつかったものに興味を持つ段になると、それにきつちりと關係を結んでしまひ、その中にある所のいいものを取つて自分の養分にしよう」と云ふかなり蟲のいい立場にたつ人間」がローファー型人間だと定義する。有島はこの二つのタイプの人を、キリスト教会や社会制度の例を挙げながら説明し、ローファー型人間の偉大性を説いている。

次に有島はホイットマン詩の特徴を五つに分けて説明している。第一の特徴が「凡ての存在の根底になつてゐる所の個性に対する非常な確かな意識」、第二の特徴が「具象」、「言ひ換えれば彼の言葉は在来<sup>（しん）</sup>の概念を盛るには適せずして彼自身の実感の表象としてのみ意味を持つて」ゐること、第三の特徴は健全性、第四の特徴は「ホイットマンの持つていた心」、即ち「ホイットマンの大きな心」、「自然な、大きな、こだわりのない態度」であり、第五の特徴として「ホイットマンの神秘的表現」を挙げている。有島はさらに、この五つの特徴

それぞれに対応するホイットマン詩の例を挙げ、詳しく説明している。

以上の、有島の「ホイットマンに就いて」の構成や特徴を踏まえた上で、李殷相の「詩人ホイットマン論」を見てみたい。紙面の制約のため、論文全体を比較することには無理がある。本稿では、李の論文の本論に当たる「三、彼の詩と思想」の内容を、順序に沿つて有島の論文と具体的に比較すること、で、「詩人ホイットマン論」と「ホイットマンに就いて」の密接な關係を論証していきたい。

まず、言及しておきたいのは、李の論文全体が有島論文の構成に従つていて、両者ともまずホイットマンの伝記的事実を述べた上で、詩の特徴に関する説明に入つてゐる、という点である。これから論じる李の論文の第三章の内容は、ホイットマンの詩の特徴を論じる部分から始まつてゐる。

李の論文の第三章はまず、「彼の孤独な一生をもう一回考へると、彼には、世に残した詩篇以外は、何もない。文字もろくに読めない老母以外には、愛する妻も、かわいい子供も、身を寄せられる家も——何もない悲<sup>（かな）</sup>壮な生涯を終えた詩人である。」(八八頁)という文章から始まつてゐる。ホイットマンが孤独な人生を生きた、という説明の上記の文は、有島論文が説くホイットマンの第一の特徴、「個性」に関する説明の中の、「彼には一人の文字も読めないやうな老母があつた

外、愛すべき妻もなく、子供らしい子供もなく、家らしい家も残しませんでした。又一つのインスティテューションも残しては行きませんでした。その事を考へると誰にでも悲壮な感じを与えるでせう」(五五九頁)に拠っていると言わざるを得ない。次に李は「唯一自己の感覚、知識、欲求、これだけのものしか彼は持ち合わせていなかった」(八八〇八八九頁)と続けているが、この部分も有島論文の「彼の感覚彼の知識彼の欲求が純粹に彼自身の者であつて決して他人のものでないといふことです」(五五九頁)から来ていることは明らかである。続けて李は、「Beginning My Studies」の原文と韓国語訳を載せているが、この部分は有島が引用している部分とまったく同じで、韓国語訳も有島の日本語訳と酷似している。以下に引用したものは、李殷相の韓国語訳を、原文を活かす形で日本語に直したものである。

私の観察が始まる最初の一步は、私をとて大きく喜ばせた、／單純な事実、意識—これらの形態—動く力、／極めて小さい虫や動物—觸覚—視力と—愛、／最初の一步はこのように私をとて驚かせ、喜ばせた。／私は第一歩を踏むとすぐ、もつと遠く行くこうともせず、／そこで長い歳月を立ち止まりさまよいながら歌を歌ったのである。(八九頁)

以下は有島の日本語訳である。

私が観察を始めるとき第一歩は私をことの外喜ばした。／單純な事実、意識—これらの形態—運動の力、／いさ、かな虫又は動物—觸覚—視力—愛、／最初の一步は実にことの外私を驚かし喜ばしたので、／私は歩み出すや否や更に遠く行く心もなく、そこに長く止まりさまよつて、有頂天に歌を歌ふのだ。(五六〇頁)

両者ともに、「研究」、「勉強」とも翻訳できる「studies」を「観察」と翻訳し、「畏敬させた」とも翻訳できる「aw'd」を「驚かせた」と翻訳している点など、翻訳の語彙が類似していることから李が有島の日本語訳を参考にしながら韓国語に訳した可能性は高いと考えられる。

続けて李は上記の詩に関して、「この詩に現れた彼は間違ひなく *Loftier* 型に当てはまる詩人である。この詩のもつ格調は在来(の)の詩がもつ *Rhythm* とは異なり、風、波、雲の「リズム」に近い省察と直覚の太い表現力方式といえよう」(八九頁)としている。上記の詩は、確かに有島が論文の前半部で「そこら中を歩きまはつて、偶然ぶつかったものに興味を持つ段になると、それにきつちりと關係を結んでしまひ、その

中にある所のいいものを取って自分の養分にしようと云ふかなり蟲のいい立場にたつ」と説明する「ローファー」の特徴が著しく現れている詩である。李のこのような説明は、有島の次のような説明のうち、引用者が傍線を引いたところと相重なるものであることが確認される。

こ、にも彼のローファーである気持ちが遺憾なく現れてゐます。彼は行きあたりばつたりに彼を迎へる者に対して興味をそゝられると何事をも棄て去つてそこに座はり込むやうな人でした。彼はそこで前人の誰もが感じなかつた様にそれを感じました。さうしてそれを誰もが云ひ表はさなかつたやうに云ひ表はしました。或人は「草の葉」が持つ格調は在來の詩のリズムとは違つて、風や波や空の雲が持つリズムと甚だしく似通つたものがある」と云つてゐます。あの一見勝手気儘に見える、彼の詩体を造り上げる為にどれ程の自然に対する深き省察をとげたかは彼以外の人々の恐らくは想像し得ない所ではないかと思ひます。(五六〇頁)

有島は上記の説明の上、さらにホイットマンが「詩人らしい直覚」をもって物事の本質を見抜いたことを語り、ホイットマン詩の個性についての説明に繋げている。だが、李殷相

の論文の場合、紙面の制約のためとも思われるが、有島の論文から内容を断片的に多数抜粋し、それらを繋げているため、李の説明のみ読むとわかりにくいところが多くなっている。これは李の論文を通していえることである。李はここで「loater」という語を用いているが、残念ながら李の論文では、有島の論文にあるような、ローファーに関する説明は一切されていなかったため、この言葉の意味が正確に伝わらない、という問題がある。そのため、鄭獻は李殷相が言及する「loater」型詩人という聞き慣れない評価が何を意味するのかはつきりしない」と疑問を呈しているのである。しかしこの疑問は有島の論文を読めば解消される。

さらに李殷相の論文は次のように続く。

「カーペンター」が話したことの中に「ホイットマン」の詩体はとても小さなものから至大なものまでの生命現象を第一義的に摂取した特殊な点でその独自の無上の価値をもっている」ということがある。存在の根底、即ちその個性を力強く、確実に意識したところから出発したことが、その真剣な生命を表している。個性の實在的な基礎からその要求に従い実働する無限なる「力」を賛美し、この「力」以外は全てを否認した。このような見地から詩人「ホイットマン」の厳肅な理想を垣間見ること

ができる。(八九頁)

この部分は、有島がホイットマン詩の第一の特徴として挙げた、「個性」に関する説明に当たるところである。有島は以下のように説明している。

いかにも彼の詩体はいさゝかも其等のものによつて煩はされけがされてはゐません。かく現象を或は生命を第一義的に摂取する点からカーペンターは二つの特色が表はれてをるといふことを指摘してゐます。その第一は凡ての存在の根底になつてゐる所の個性に対する非常に確かな意識であります。(中略)……此環境の力には極大なものがあつて、個人はその力の前には無価値なものとも見られないではありませんが、(中略)個性が實在の基礎であつてそこから出発して個性の要求としての愛それが環境に働きかけて或は恋愛となり或は友情となりそこに内在的な共同生活の相が成立つので環境の固定化した所産であるインスティチューションが個性の實質を造るのでは断じてないと云ふことを自分の個性そのものを通して実証してゐます。(五六〇～五六二頁)

李と有島は共通して、ホイットマンがあらゆる現象や生命

を第一義的に摂取した、とするカーペンターの指摘に言及し、個性こそが存在の根底にあることを強調している。

次に、李は次のような文章で論を進めている。

観念に詩の衣装をまとわせたような感がなくはないが、実はそうではない。詩人自身が生活経験の上で実感したものの美的表象であると捉えるべきで、むしろ彼を独特な価値所有者としてみるべきである。(八九～九〇頁)

この部分は、有島の論文では、第二の特徴である「具象」に関する説明の導入部に当たる。李が引用した箇所は次の内容の傍線を引いたところに当たる。

だから或一の観念が美しい詩の衣被せられて表出される(英国の詩人などよく見られる如く)ことなく、詩人の生活そのものの端的な具象化が一つの観念となつて表はれてゐる結果になつてゐます。言い換へれば彼の言葉は在来概念を盛るには適せずして彼自身の実感の表象としてのみ意味を持つてゐます。(五六二頁)

しかし、上記の部分では、李は有島と同じような語彙を使

いながら主張の内容は多少食い違う。有島は、ホイットマンの詩は観念が美しい詩語に飾られることがない、と言っているが、李の方は「観念に詩の衣装をまとわせたような感がなくはないが」としている。李の論文の中ではこのようなことが度々生じているが、これは翻訳の失敗であろうか、それとも解釈の違いであろうか、判断しかねるところである。

次に李は、「カーペンター」が（一）個性から現れた「ホイットマン」と（二）端的な具象化が一つの観念になって表現されることから現れた「ホイットマン」を研究した点もこれまで話したことと同じ意味だと捉えられるし、有島武郎（ホイットマン研究者）が話した「ホイットマン詩の健全性」というものも皆同じ意味であると思う」（九〇頁）としている。この部分で、我々は李が「ホイットマン研究者」として有島の名前を言及しているところを確認できる。しかし、上で見たように、李は有島が「具象」の説明をしたところをもって、第一の特徴である「個性」や、第三の特徴として挙げている「健全性」をもひっくり返して説明していることがわかる。このようなところは、有島の論文といささか異なる部分であるといえよう。

李はこの部分に続けて、次のように詩人の健全性を強調している。「社会の基調がどれほど頹廢的で、病的なものであれ、詩人は必ず健全性がなくてはならないし、また社会生活

の基調に大きな革命を与え、葛藤を興さなければならない」（九〇頁）

この部分は、有島が説明する第三の特徴、「健全性」に関する説明の中の以下のところから来ている。

社会生活の基調の乱れの為に、如何なる階級にも健全な要素は浸み込んで来て壊廢的な病的な傾向は生活の心髓まで浸み通つてゐるやうに見えます。（中略）彼は外面の習俗によらず内部からの要求によつてこの忌むべき傾向に対して徹底的に反抗の声を挙げてゐます。（五一頁）

李と有島は共通して、社会の基盤が乱れた時に、ホイットマンのような健全な詩人の声が必要だとしている。しかし、李が「社会生活の基調に大きな革命を与え、葛藤を興さなければならない」として、外に向かつて行動することを主張しているのに対し、有島はホイットマンが「外面の習俗によらず内部からの要求によつて」反抗している点を高く評価していて、二人はいささか異なつた主張をしているように思われる。

さらに李の論文は次のように続く。「大地の睿智で養育された「ホイットマン」であつて生長があり、生命があり健全な人間讃頌がある、というのは「カーペンター」の言葉であ

この部分は前に引き続きホイットマンの健全性に関する説明になっており、この部分は間違いなく、有島論文の「彼は地から生れ地に育て上げられ、地の智叡によつて練達したやうな人間に対して殊に引附けられました」（五六二頁）という部分から来ている。しかし、これは、カーペンターの言葉ではなく、有島の言葉である。また、李の論文に現れる「人間讃頌」という言葉は、有島は使っておらず、李独自のものである。これから確認していくことであるが、李の論文の大きな特色として、この「人間讃頌」や「人間全体を包摂」などの言葉を頻繁に用いながらホイットマンを説明している、ということがある。

一千の完全な男子と女子が現れる、／その周囲には皆、多くの群れが囲んでいる、／そうして快濶な子供と青春とが贈り物をもって（九〇頁）

次に、李殷相は以下のような説明に移っている。

界を運搬せんとした人物である。(九〇頁)

以下の内容に拠るものである。

ると云ふ様な女々しい態度は彼にはなかつた。(中略)

小児が総ての物に対して、先づ神の様な驚きを現し、次に、芸術家の様な興味を感じ、さうして小女<sup>マヤ</sup>の様な愛撫を与へる、その様な自然な、大きな、こだはりのない態度が彼にはありました。(五六二頁)

有島はこのような説明の後、‘Song of Myself’の一句を次のように日本語訳のみ引用している。「私を通じて禁ぜられた声々が、／性と淫欲の声々が——面紗された声々、／而して私はその面紗を取のぞく、／不浄なもの、声々、それは私によつて浄化され、変容する」

一方の李殷相においても、前述の文章に続くものは、有島の引用した箇所に対応する以下のような韓国語訳である。

「私を通して禁じられた声々が、／性と淫欲の声々が——顔を隠した声々、／ああ、私はその面紗を取り除き／汚された声々、それを私がいかにし、顔を变えてあげよう」(九〇頁)

李は、続けて、「愛する娘たちよ、太陽がある日まであなたと私は人である」という詩句には彼の人生観の一面が表れる。どんなに人間全体を包摂した詩人であろうか」と言及しているが、ここで引用されているのは有島が論文の後半に

「ホイットマンの大きな心」の例として全文を引用している、‘To a Common Prostitute’の一句 ‘Not till the sun excludes you, do I exclude you’であると思われる。李はここでも、ホイットマンの「人間讃頌」の姿勢を「人間全体を包摂した詩人」という言葉で高く評価し、有島とは違う観点を見せている。

一方の有島は、‘To a Common Prostitute’の全文を、原文と日本語訳をあわせて紹介している。李が引用している箇所の有島による日本語訳は「太陽があなたを見放さない中は、私もあなたを見放しはしない」(五九一頁)となっている。李の「あなたと私は人である」という翻訳は、原文とは少し異なっているが、意味は通じるのではないかと思う。

李殷相は有島が説明するホイットマンの特徴の中で、有島が「愛」、「ホイットマンの大きな心」などと説明している第四の特徴に特に注目していて、この特徴の説明に多くの紙面を費やしている。李はホイットマンの、どんなに罪深い人間に対しても偏見なく大きく包む姿勢を高く評価しているように、先ほども指摘した通り、特に、「人間讃頌」や「人間全体を包摂する」という語を頻繁に用い、そのような視点から、ホイットマンの愛に注目している。

李は論文を次のように続けている。

この他にも女性全体を「対想<sup>マヤ</sup>」として詩人の女性観を

説盡した例であるとか、その女性に対する恋愛の情が男性に移展され所謂 Camerado (伴侶) に向かう憧憬と執着の力が跳ね伸びる独特な世界―肉を離れた精神の浄化―を創造した詩人の偉大性を見ると、現世的桎梏から飛躍し、万人結合の充実した人間讃頌を発見できるのである。

(九〇―九一頁)

ここでも李がいたる結論とは、「万人結合の充実した人間讃頌」である。しかし、有島の方は、以下のように、李とは異なる説明になっている。

特に或る一人の女性を対象とはしてゐずに、女性そのものに対して云ひかけてゐる様な形があります。(中略) 女性に対する恋愛から男性の夫れに移つてくると、彼は肉の世界から段々と離れて、清いほがらかな、精神的の感情に移つて行きます。彼は其処で現世的な桎梏から徐ろに解放され、浄化された力強い自然の牽引力によつて、彼の伴侶と結び付きます。彼の不思議の造語の一なる“Camerado” (伴侶) といふ言葉は彼独特な此氣持を現はさうとしたものであるに違ひありません。彼は此処に人と人との一番正しい結合点を見出しました。さうして此処から、そのデモクラシイの主張は発足してゐます。此

の結合によつて人と人との間を滑らかにし、さうして其処から生活の一番正しい交響樂を作り出さうとしてゐるのであつて、互ひに自由を許し合ふ人々の自由なる社会生活が其処に美しく夢みられてゐます。(五六三頁)

有島は、彼にしてはめずらしく、ホイットマンのデモクラシーに言及し、ホイットマンの謳い上げたデモクラシーとは、人と人との間の「愛」から出発していると説明している。しかし、李殷相は、先に見たように、デモクラシーには一切触れず、「万人結合の充実した人間讃頌」としてまとめてゐる点はとても興味深い。

次に李は、「散文的な彼の詩体は往々にして歓迎されなかつたが、それは彼の文字と言語の配列の中で動躍する内的に充実した生命を等閑に付したことに起因する病める見方だといえよう」(九一頁)と言及しているが、これは、有島が説明する第五の特徴、「神秘的な方面」に当たる説明であり、上記の引用は、有島の説明のうち以下の部分を要約して述べたものと思われる。

私達の持つてゐる習俗的な觀念に従つて、ホイットマンの詩を通読したものは、その余りにも散文的な表現にあされるかも知れません。(中略) それは彼の有する言葉

がどれ程、内的な生命によつて力づけられてゐるかといふ事を、語る良い例証の一つです。さう云ふ叙事的な所に来ると真に一字も増減する事の出来ない様な言葉の見事な排列があります。(五六三―五六四頁)

有島はホイットマンの詩の神秘的方面に関して、上記した引用の他にも、様々な例を挙げながら興味深く説明しているが、李の場合は、上に引用した二行ほどの言及のみで終わっている。しかし、具体的に詩を引用することはないものの、後半部では具象に関する説明を「叙情詩は古来の他のものに見られない特殊な具象的な規律が、極めて粗剛でありながらも朗読する瞬間には極めて滑らかで、その詩想の流勢を塞ぐことはできない」(九二頁)とするなど、比較的詳しく述べられている。韓国のホイットマン受容において、おそらくこの論文はホイットマン詩の優れた文学的表現に関して紹介した初めてのものであろう。その点において、「詩人ホイットマン論」の意義は大きいと言える。

以上が、有島の論文でいう、ホイットマンの五つの特徴を説明している部分にあたる内容である。

次に李殷相は、有島の論文同様、それまで説明してきた五つの特徴を、具体的に詩を引用しながら説明するところに移っている。しかし、このような順序は有島の論文と対照して初

めて明らかになるものであつて、李は前半部と同じように、詩の特徴がいくつあつて、それらはどのようなものである、という詳しい説明を省いて、唐突に文を始めているため、李の論文のみを読むとわかり難いところが多い。

それでは、李がどのような詩に言及し、説明しているのかを見てみたい。

李は「個性の権威と人類意識の呼訴との一致から求めようとしたその努力の絶大な事業であることを誇張せざるを得ない」として、「“Carol of Words”に表れる詩はそれを証明しうるに足る一例」(九一頁)と言っているが、直接引用はしていない。この内容は、有島が、「第一の個性の主張、即ち存在に対する同胞感の訴へ、凡ての存在に根ざしする個性の権威はいかなる言葉で彼によつて表現されたかといふに、」という言葉の後、「Carol of Words」の原文と日本語訳を引用しているところに拠っていると思われる。

李はまた“Whitman a cosmos”（私は「ワルト、ホイットマン」一つの宇宙）に言及し、この詩は英雄的意味ではなく「真理を固守した者の真摯な告白」(九一頁)としているが、引用はしていない。この詩の場合も、有島が全文を「個性」の例として引用していることから、李がこのような言及をしたものと思われる。この他に、李は有島が「個性」の例として引用した“Song of Myself”のうち以下の三句を直接引用している。

「万が一私が特別な何かを敬拝するというのなら、／それは私の肉体或はその一部分の拡大されたものであらう」

「私が私の母から産まれる前に永遠なる時代が私を引導した、／私の種は決して生気を失わず―何も私を押しつぶせなかった」

「全ての力が私を完成させ、喜ばせるため絶え間なく使われた、／そうして今この地点で私の健全な精神と共に立っている」(九一―九二頁)

李は、ホイットマンが自己の存在の偉大性を堂々と謳い上げている箇所、自己や個性の特徴が良く現れている箇所を選択し、翻訳している。

次に、李は「具象」に関して説明した上で、「高翔する空想と孤独の実感から合一から生まれた強力で幻影的な“Wild Antecedents”と“Song of the Open Road”のようなものはその格好の例である」(九二頁)として、この二つの詩を引用はせず言及のみしている。しかし、‘Song of the Open Road’の場合、その著しい特色は具象ではなく健全性であり、有島もこの詩を「健全性」の例として挙げている。

また、李は「自省と悔悟と人間愛」は簡明にこの一節でわかる」(九二頁)とし、有島が「愛」の例として最初に挙

げている(五八七頁)‘You Felons on Trial in Courts’の一句を引用している。以下にその一部を引用する。

姦欲と邪悪が私を迎え入れる、／私は犯罪を犯した人と一緒にいて、燃えるような愛を覚える、／私も彼等の仲間であることを知る―私自身が罪囚であり、漁姦者<sup>4</sup>に属した人である。(九二頁)

既に言及したように、ホイットマンの「愛」に関する特徴を、李は重要なものとして捉えていたようで、ここでも‘You Felons on Trial in Courts’に関して「嘆嗟」や「悔悟」が表れる詩がどんなに彼の心の浄化や沈思を垣間見させてくれるだろう。暗雲と孤独の中で雄々しく向日性的気力を持ち、同時に人間が遭遇する罪悪や悲哀や不幸や譴詐を切り抜け、真理を探そうとする悲痛尊厳な彼の人格を我々に悟らせる」(九二―九三頁)云々と詳しく説明している。これは「神秘」の側面が前半部で簡単な説明をされるに留まり、後半では言及すらされていないのとは対照的である。しかし、論文の前半部でもそうだったように、有島は後半でも「愛」に関連してデモクラシーに触れ、以下のようにかなり詳しく説いているが、李はそれには一切触れていない。

彼れのこの愛は隣人から隣人に及んで遂にデモクラシーを称道させました。彼れは神聖なる平民 (Divine Average) を賛美しました。彼れはこの平民の出現の為に、その平民の間に完全な理解が成立つためには、いかなる革命をも餘り高価過ぎるとは思ひませんでした。佛国が革命によって氣息喘々たる時、ホイットマンは米国の一隅から熱心な援助の声を寄せて、平民の勝利、平安幸福の爲めには、国境も徹し、王も廃せよと叫びました。この方面に於ける彼れの思想を更らに探らうと思ふなら、「自選日記」と訳されてゐる *Specimen Days in America* を読み試みられるがよいと思ひます。眞実の意味に於て米国のデモクラシーの爲めに彼れの寄せた火のような愛着と深い懸念とは、簡素雄勁な文章の中に深く汲み取られるでせう。(五九二頁)

有島はこのように平民とデモクラシーに対するホイットマンの強い思いをかなり詳しく紹介しているが、「愛」に強い興味を示している李殷相は、ホイットマンの「愛」の一つの形として説明されているこの部分を「彼の平民の爲の強い主張はここで論じることではできないが訳本自選日記という日文 (*Specimen Days in America*) を参照すれば、その主張を知るのに大いに役立つであろう」と簡単に紹介した上、「彼の

Loafers 的生活はこの点においてより一層意味が深まっていると思う」(九三頁)として、デモクラシーに言及することはなく、意外にもこの部分で再びホイットマンのローファア的生活に触れている。

李殷相は「三、彼の詩と思想」を、「回顧するに——個性、自由、勢力、都市、女性、男性、靈肉、善惡、眞理、痛感、孤独、情熱、意志、健全……このようにして人間愛、生、死、神秘、無限、永遠にまで接触しようとした詩人「ワルト・ホイットマン」」(九三頁)とホイットマンのあらゆる特徴や理想を挙げて締め括っているが、この文章でもデモクラシーは言及されていない。

李は次に第四章の「結論」に移って、「愛、神の觀察の不朽の名編」を紹介することを結論代わりにしているが、ここで引用されている詩は、有島も「愛」の例として挙げてゐる *Gods* の全文である。李は無限、生、死、あらゆる人々、空間、時間など、全てのものを「神」としているこの詩を引用し、「彼の全思想が表れている」(九五頁)と説明している。李のこの言葉からも、彼が、ホイットマンの詩において最も重要だと捉えたのが、万人を平等に愛し、全てを包摂する点であることは明らかである。

おわりに

以上、李殷相の「詩人ホイットマン論」を、本論に当たる第三章を中心に、有島武郎の「ホイットマンに就いて」と比較・対照しながら検討した。本稿のこのような作業を通して、李の「詩人ホイットマン論」が有島の「ホイットマンに就いて」から抽出・翻訳されたことが明らかにになったと思う。

李殷相の論文は、「ホイットマン論」として高く評価される有島の「ホイットマンに就いて」を、わずかな紙面の中、しっかりと構成で、いくつかの点で相違点はあるものの比較的忠実に紹介している。比較の結果、五つの特徴のうち、李が最も魅せられたものは、ホイットマンの、人間全体を包摂する大きな愛であったことが明らかになった。また、有島が言及する民主主義に関する概念を、李は論文のなかで一切触れていないことも浮き彫りにされる。さらに、当時の韓国で「デモクラシーの詩人」という側面が強調され、宣伝されていたホイットマンについて、その詩体の具象性や表現力を李が紹介したということも明白になった。

とはいっても、筆者にとって、自国の文学者が、日本の文学者の論文をそのまま翻訳して使っていたことを論証するのは、決して楽しい作業でなかったことを告白しておきたい。それにも拘らず、この論文を書くことを決意した背景には、「詩人ホイットマン論」の研究においてそうであるように、韓国における外国文学受容の研究において、必須である韓日

比較文学研究はまだあまり進んでいないため、多くの問題が不明のまま置き去りにされている、という実状がある。ホイットマンの最初の受容期が、政治のみならず文化全般が日本の影響下に置かれていた一九二〇年代であった、ということ考虑すると、まずは日本文学との比較研究を通して事実関係を明らかにすることが重要なはずである。事実、有島の論文を明らかにすることは李殷相の「詩人ホイットマン論」の誕生は不可能であつた。従つて「ホイットマンに就いて」の存在は、「詩人ホイットマン論」を理解するために、必ず押さえておくべきものである。この前提なしには、「詩人ホイットマン論」の研究は始まらない。

本稿は比較を通じた事実究明に終わっているが、今後はこのような事実を土台にして、李殷相「詩人ホイットマン論」そのものの研究及び、韓国におけるホイットマン受容の研究を深めていきたい。

#### 注

- 1 本稿では李殷相「詩人劉ヒョムン論」「朝鮮文壇」第八号、一九二五年五月。「影印本（復刻版）」（ソウル：成進文化社、一九七一年）、八四―九五頁）に拠った。

- 2 鄭獻「정치적 이상과 인간적 현실——윌트셔먼 시와 이념의 세 단계」(附録) 일제강점기 한국의 윌트셔먼 수용 (政治的理想と人間的現実——ウォルト・ホイットマンの詩と理念の三段階…(附録) 日帝強占期韓國のホイットマン受容) (高麗大学校博士論文、一九九五年)、八六頁。引用は拙訳による。
- 3 金容稷「韓國近代詩史」(上) (学研社、一九七六年)、五三五頁。
- 4 鄭獻「일제강점기 문학 지식인들의 이데올로기 탐구: 이강상 (李殷相) 의『詩人 윌트셔먼論』(日帝強占期文学知識人たちのイデオロギー探求李殷相の『詩人ホイットマン論』)」、『英美文化』第六卷一号(韓國英美文化学会、二〇〇六年)、二二三～二五三頁。
- 5 鄭獻、同論文、二二五頁
- 6 本稿では、有島武郎「ホイットマンに就いて」(『有島武郎全集』第八卷、(筑摩書房、一九八一年)、五三四～五九五頁)に拠っている。なお、引用時の日本語表記は、旧字を新字に改め、旧仮名遣いはそのまま従った。
- 7 「解題」『有島武郎全集』第八卷、七〇四頁
- 8 「ホイットマンに就いて」、五三四～五三五頁。
- 9 拙訳、原文韓国語。以下「詩人ホイットマン論」の引用は凡て拙訳に拠る。
- 10 李と有島の翻訳が酷似していることは、他の翻訳者の翻訳と較べるとより明らかになる。酒本雅之は、'studies'を「勉強」、第四行目の'aw'd me and pleas'd me'を「わたしを畏敬させ、とてもわたしの氣にいった」(酒本雅之(訳)『草の葉』(上) (岩波書店、一九九八年)、六四頁)と翻訳している。
- 11 鄭獻、前掲論文、二二九頁。
- 12 亀井俊介「近代文学におけるホイットマンの運命」(研究社、一九七〇年)、五六二頁参照。
- 13 鄭獻も李の論文における「具象」に関する説明を、「当時としては非常に進んだ、鋭い解釈」(前掲論文、二四〇頁)として注目している。
- 14 鄭獻は「漁姪」という翻訳が「とても妙な詩語の選択」(同論文、二二三頁)として、当時韓國の俗語か、または誤植の可能性があると述べている。しかし、この語は有島が原文の'prostitutes'を「漁淫である」と翻訳しているものに拠る。
- 15 有島は「ホイットマンに就いて」で、「彼れも亦歎嗟と悔悟との前に打くだかれねばならぬ瞬間を幾度か有し、生活の狂ひに対しては「黙して沈思」せねばならぬ場合を屢持つたには相違ありません。然しながら彼れの向日性は、それらの暗雲に襲はれ、ば襲はれる程、雄々しくその特質を發揮しました。恐らく彼れ位一般の人が遭遇せねばならぬ不幸や、罪悪や、誹詐や、ひがみ根性を身近に見且つ触れたものは多くありますまい」(五八七頁)というように説明している。
- 16 ホイットマンの *Specimen Days* は高村光太郎によって大正六年から一〇年まで「白樺」他複数の雑誌に翻訳、連載された。完訳は「ホイットマン自選日記」と題されて一九二一年九月、叢文閣から出版されている(亀井、前掲書、四四五頁参照)。「詩人ホイットマン論」の内容からは、李殷相が高村訳の「ホイットマン自選日記」を読んでいたかどうかは確認できない。